無題

坂口安吾

K君。

御便り越中魚津の貧乏寺にて拝読。当所は旧友の今は行ひすました草庵であります。八月一杯滞在。九月にこの坊主の紹介で黒部山中の酒造家へ草鞋（わらじ）をぬぐ予定です。頃しも酒のなんとやらいふ季節でありますが、さういへば流浪の餞別にと君から貰つた酒盃、君の店で最も高価な珍器といふ御自讃であつたが、坊主の意見によれば名古屋製のまがひ物の由、黒部山中の清酒にはちと向きかねるといふ辛辣な眼識でありました。

さて、紀元よりの課題の件、改まつてどういふことを五枚の原稿紙に書きつらねていいやら、とんと見当

がつかない。君の文面も至極曖昧、あれを言ふかと思へば忽ちこれをいふ底の甚だ妖気漂ふ依頼状であつてみれば、当方では、小説の面白さに就て書くのやら小説は面白くないに極つてゐるといふ異体の知れない忿懣に就て感慨を洩して然るべきものであるやら、判読のつきやう筈のものではない。

流浪直前、バンヂャマン・コンスタンの「アドルフ」について、一頻り私は君と語り明かした幾夜をもつたが、あの頃の考へは今も尚変らないばかりでなく、芭蕉の風流を憎む気持は愈々熾烈の度を加へるばかりのやうです。

私はやはり、人間の感情に対する新らしい批判の確立、憎しみや愛や悲しみ怒りを最も厳格に追求することによつて、神によつて許さるるとも我によつては許されず、神によつて許されじとも我によつては許さるる底の、生命の道徳を確立するためのほかに、小説を書く勇気はありません。

　東洋的な諦らめと悟り、これほどちかごろ癪にさわるものはない。つづいて、之に対する軽卒な反抗、つまり殆んど追求といふことをせずに、軽々しく怒り、歎き、悲しみ、喜び、自殺するところの無批判的な自己惑溺、これも亦（また）、ややともすれば小生の陥り易いと

ころであつて、同様癪にさわらざるを得ぬ一敵国であります。

まことに真剣な情熱といふものは、必然的に最も利己的なものであります。その間、日本人の如く、軽々しく他人の立場を計量し思惑を働かせて、同情し、寛大となり、諦らめ、いい加減のところでヒラリと利他的な安手な悟りへ身を翻すべき不誠実さは許さるべきでありますまい。必ず一応は利己一点ばりに追求の極地へまで追ひつめ、その底に行きどまつたとき、初めて感慨を洩らし、道徳を確立し、風景を眺め、而して出発すべきであります。

不幸にして、日本にはかやうな教養伝統がありません。単なる博学は教壇的なものであつて十年の勉強によつてもかなりのものを会得しうるが、この感情の教養は全く家庭的なものであつて、父子数代の歴史を賭け、誠実にして真剣な追求と教訓と内省と感受と表現とによらなければ、ちよつと会得しがたいのではないでせうか。

日本の心境小説は、貧乏や情痴に対する内省批判の方法が十年一日の如くであつて、十年一日の規準によつて笑ひ怒り歎き悲しんでゐるために読む勇気がないのですが、私としては、喜怒哀楽を更に掘りさげ追求

しきることによつて、新しき批判法を、道徳を、ひいては一切の精神上の価値を確立せずには、文学すべきではないと思はれます。悲しみ、怒り、歎く前に、果してここで悲歎していいのかと批判を働かしてみることは、然し已に一応の教養をもつた人間にとつては、甚だその既得の思想に瞞着され易いものであつて、ただこれだけの単純なことでも、相当の難事のやうであります。要するに、日本の小説家に罪があるのではなく、感情にも追求といふ苛酷な手段のあることを教へなかつた、日本文化史に罪があるのでありませうか。

数日前、坊主にすすめられて、始めて福音書を読み

ました。思想の浅深に就てはとにかくとして、基督（キリスト）なる男が、己を信ぜざる者に対して実に生々しい憎悪を懐いてゐるのには一驚しました。悪魔外道をも解脱せしめやうとする仏教に比べて、思想としてはとにかく、人間の血と肉を賭けた文学の出発としては、たしかに基督教を持つ人々が幸福であつたに相違ありません。

陶淵明に、日日酒をやめようとしたが、止むことの楽しからず、己れを利せざるを知り、平生酒をやめず、といふ呑気な句があります。こと酒となるや、愚生も亦やむることの己れを利せざるを知り、平生酒をやめないところの、基督教徒の如き頑強な追求精神をもつ

ものでありますが、ああ之は果して偉大な道徳の確立であらうか！

Ｋ君、今度は名古屋製のまがひ物ではない酒盃を、九月前にぜひ一対、表記のところへ送つてくれたまへ。

頓首

底本：「坂口安吾全集　01」筑摩書房
１９９９（平成11）年５月20日初版第1刷発行
底本の親本：「紀元　第二巻第九号」
１９３４（昭和９）年９月１日発行
初出：「紀元　第二巻第九号」
１９３４（昭和９）年９月１日発行
入力：tatsuki
校正：noriko saito
２００９年４月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。